

特別展「文学館とっておきコレクション 1991～2002」（会期 2002年4月25日～6月23日）図録から転載。この時期、目録の整備作業中であった。

## 姫路文学館蔵金井寅之助文庫について

山本 秀樹

金井寅之助文庫（以下「金井文庫」と称する）は、京都帝国大学文学部卒、元松蔭女子学院大学教授、日本近世文学研究者金井寅之助氏（明治44年～昭和63年）の旧蔵書である。平成2年2月23日、姫路文学館オープンに先立って、御長男利孝氏より、その蔵書が、地元の姫路市に寄贈され、現蔵に至る。寄贈当時、2月24日付各紙でも報じられたが、その旧蔵書は、江戸明治期の刊本・写本から日本文学研究書・雑誌に至る、金井氏の書齋にあった書物のおよそ全て、総計約3万3千点にのぼるものである。

そのうち、今日的に見て稀少価値が高いのは、何と言っても江戸・明治期の書物である。以下には、主にその和本（和紙に印刷・書写された本。したがって、江戸～明治期のものが多い）について述べる。

金井文庫に蔵される和本の特徴を述べれば、まず、江戸時代前期から明治の全般にわたる蔵書である、という事があげられる。いずれかの時期、いずれかの分野に、対象を絞って収集されたものではなく、漢籍・思想・文芸書・文書・書簡から辞書・実用書・パンフレットのようなものに至るまで、その収集範囲は可能な限り広い。

この長所を裏返せば、集中的に点数の多い、まとまった集書分野を持たない、という悪い言い方をすることも可能なのだが、金井氏としては、ともかくも入手可能な書物を、可能な限り購入された、という事なのであろう。金井文庫を通覧すれば、（妙な言葉づかいになるが）その「本好き度」に驚かされる。その収集範囲の広さは、この文庫だけでも江戸時代の出版の総体・性質を推して知る事を可能にしている、と言っても過言とは思えないほどである。どの分野の物も必ず最低1点はある、という言い方をしても好いだろう。

今回の展示に当たっては、まずは金井文庫のお披露目としての意味を勘案し、今日的に名の知られた書名や人物に関する資料を選んで展示する事に主眼を置いたが、実は、そのような、現代人の耳目に親しい書物以外の、さほど名も知られぬ人・書物に関する所蔵に、金井文庫の本領がある。今日、江戸時代までの書物の、今日知られる限りの全てのタイトルとその所在が『国書総目録』としてまとめられているが、それを参照しても所在不明の書物が金井文庫にあつたりもし、また、そもそも『国書総目録』に見られないタイトルのものも金井文庫には含まれている。

また、第二の特徴として、播磨に関わる書物が比較的多い、という点があげ

られる。こう書くと、先の記述と一見矛盾するように思われるかもしれないが、金井文庫の蔵書を通覧して行くと、著者の出身地が播磨であったり、序文を書いている人が播磨の人であったり、出版者の一人として播磨の本屋の名が記されていたり、という事にままたま出くわし、印象に残るのである。あくまでも推測ではあるが、これは金井氏が本を購入する際に、その意識にあった事柄なのではないか、と思う。金井氏は、勤務校が発行する松蔭国文資料叢書の1冊として『播磨近世芸文集』（昭和52年）を編んでもおり、自らの出身地である播磨という土地の文化文芸に特別な関心を払っていた事はまちがいないからである。

以上、金井文庫の特徴を述べた。ついでその主であられた金井氏御自身について紹介して置く。

金井氏は、日本文学史上「近世」と称される、江戸時代を中心とする時代を専門領域とされた。生前発表された論文は、井原西鶴の作品をその主要な研究対象とする。

氏の西鶴研究が、学界において重んじられた事は、その論文「西鶴小説のジャーナリズム性」（昭和32年12月発表）が、日本文学研究に関する必読論文の集成である日本文学研究資料叢書（有精堂）の一冊『西鶴』（昭和44年）に収録されている事のみをもってしても明らかである。

「西鶴小説のジャーナリズム性」は、西鶴が書いた読み物の基底にジャーナリズム的関心があり、近代小説と西鶴の作品は同質のものではない、という事を論証しようとするものである。その内容は、実際、今読んでも刺激的である。

この論文を含め、氏の主要論文は、西鶴以外を対象とするものと併せて『西鶴考 作品・書誌』（八木書店。題字中村幸彦氏）として、大谷篤蔵・木村三四吾氏ら日本近世文学研究者の手によってまとめられ、その一周忌日である平成元年3月11日に出版された。当代一流と目される研究者たちを、論文集出版に向けて動かすだけの力を、氏の研究論文は持っていた。

金井文庫約3万3千点は、その氏の研究の独創性を培い、支えた土壌を示すものであり、江戸時代の文学、あるいは、出版・文化に関心を持つ者にとっては垂泥の蔵書である。たとえば、大谷篤蔵氏は、金井氏の旧蔵書を大学図書館に入れたいと希望されていた、と聞く。日本近世文学研究者の旧蔵書なのであるから、言うまでもない事ながら、金井文庫は、質量共に「研究」に活用されるに値するものである。

それほど蔵書が、今、姫路文学館にある。広く、この蔵書が、真摯に読まれ、活用される事を願ってやまない。その和本に関しては、現在、目録の整備を進めており、その完成によって多くの人が利用しやすくなるのは間違いない。

（やまもと ひでき／岡山大学准教授）